AACK 京都大学学士山岳会 No.90

Newsletter

August 2019

http://www.aack.info

目　次

1960 年春山「黒部中流合宿」と「十字峡横断」
2019 年春、京都で回想の集い　酒井尚平 1
十字峡横断を回顧する　田中二郎 5
追悼　原剛さん（2019 年 1 月 2 日逝去）2
原さんの「山小屋サロン」　宮坂　実 11
ハラさんと京大ヒュッテ、ベベヒュッテのこと　山田和人 13
第 49、50 回雲南懇話会のお知らせ　山岸久雄 14
会員動向 14
編集後記 14

1960 年春山「黒部中流合宿」と「十字峡横断」

2019 年春、京都で回想の集い

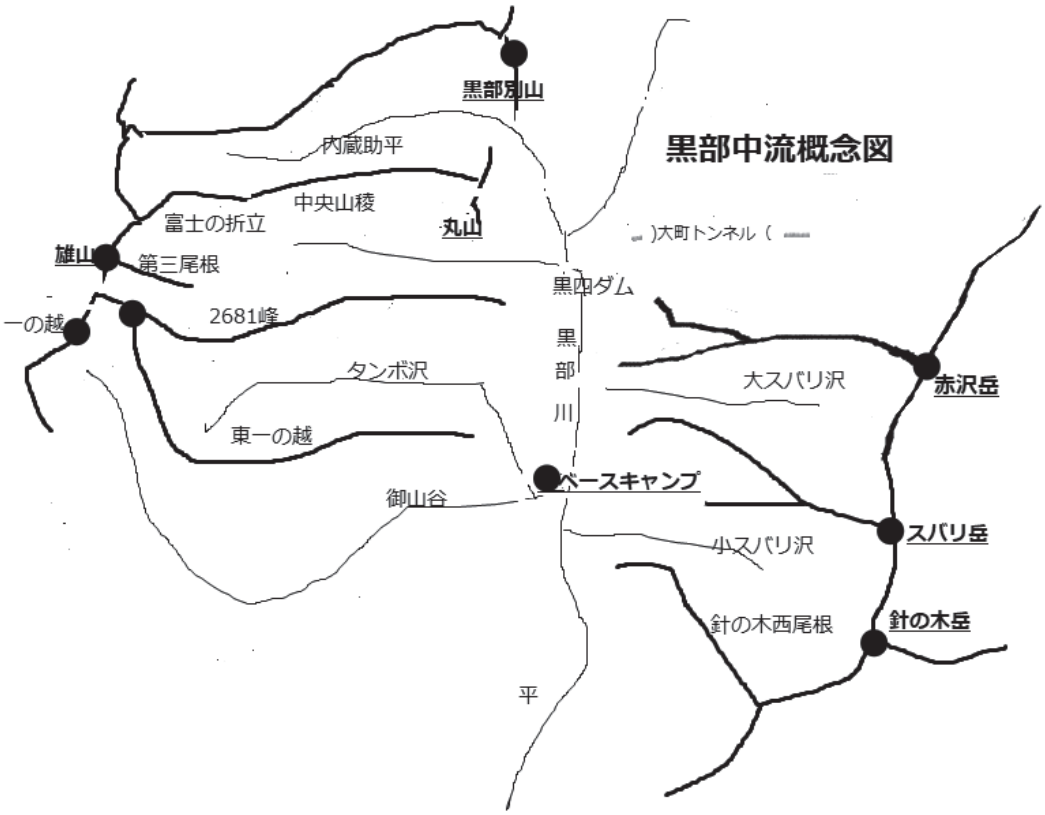
酒井尚平

初めに

平成最後の春、59 年前の 1960 年春山に参加した 11 名が、京都五番町の「月の出」に集まった。黒部春山の回想が趣旨だったが、開会した途端、西部ルーム、笹ヶ峰ヒュッテ、斗六酒房が再現、八十才過ぎの男らが、語り、唄い、盃を重ね、あろうことか、深夜まで二次会三次会をやってのけた。若いころに戻った、極上の一日であった。黒部春山について一筆書けと指名された。山行詳細は、部報第 8 号に 40 ページ分掲載されているので、概要のみ記し、1960 年前後の仲間たちの思い出を加えた。傘寿を越え、記憶不明なところはあるが、ご寛容のほどお願いしたい。

「月の出」で

集まった OB は 1957 入部の（L）谷口朗はじめ、小澤良夫、酒井尚平、笹谷哲也、塩瀬捷一郎、原田道雄、福本昌弘、松井千秋、脇野征一、田中健一、田中二郎。今回の世話役、原田 A スケ、田中ジローに感謝している。



1960 年春山概要（黒部中流と十字峡、合計 35 名参加）

①黒部中流合宿　1960 年 3 月 9 日～ 27 日

メンバー　(L) 谷口　小浜　笹谷　酒井　沖津　高橋　白井　饗庭　野村　清水　大竹　守屋　大森　中野　山田　岡野　伊藤　岡阪　富田　仲　羽根田　柊　村山　橋本　安原　以上 25 名

黒四大町トンネル経由、御山谷に BC 設置、前半は後立山の赤沢、スバリ、針の木西尾根登攀と大スバリ沢にサポート隊を、後半は立山東面の黒部別山、中央山稜、第三尾根、2681 峰、東一の越など、放射状に登攀を重ねた。赤沢、スバリ、針の木山行は山岳史にも記録されている。BC 設置し、食料、装備軽量化、トーキーによる連絡など新機軸を活用して、25 名の参加者がもれなく多方面に複数登攀した新機軸の大型合宿だった。詳細記録に代えて、日程一覧をまとめた。黒部中流を縦横無尽に歩き回った行動が一目瞭然である。なお、BC 近くに「御身大切に」という看板があった。その後数十年、生活の標語にしてきた。

②黒部十字峡横断

3 月 15 日～ 4 月 7 日

メンバー　本隊 (L) 塩瀬　原田（道）　松井　安田　田村　笠目　田中（二）　以上 7 名

サポート隊 (L)　原田（浩）　三島　田中（健）　以上 3 名

鹿島槍赤岩尾根から入り、牛首尾根を下って十字峡横断、黒部別山北尾根、ハシゴ谷乗越、御山まで、後立山稜線から立山稜線まで 16 日、剣岳を経て早月尾根を下る総行程 24 日の大縦走だった。装備・食料の共同装備は 222 キロ。ルート作り、デポ設定、歩荷を繰り返した。十字峡横断は 1954 年に脇坂、平井先輩が偵察してから、4 回の撤退を経験、積雪期初の宿願を達成した。牛首までのサポート隊の支援が貢献した。黒部中流と対照的に少人数精鋭で、黒部別山北尾根の奮闘は、当時の記録を読むとき、興奮を禁じ得ない。今回、田中ジロー兄が、十字峡山行を回想して寄稿している。

黒部中流日程表　1960 年 3 月

3月9日	京都発	(註)★☆はリーダー				
10日	移動	京都大町				
11日	BC設営	関電ルート				
12日	偵察	赤沢西尾根	☆小浜/饗庭/安原/富田			
	偵察	大スバリ沢	☆笹谷/守屋/山田/岡坂/柊			
	偵察	スバリ西尾根	☆沖津/高橋/酒井/岡野/中野			
	偵察	針の木西尾根	☆白井/大森/村山/羽田			
	偵察	タンボ沢	☆谷口/大竹/仲			
13日	ラッセル	スバリ西尾根	☆沖津/中野			
	偵察	タンボ尾根	☆笹谷/清水/守屋/山田/大森/柊/富田/岡阪/羽根田			
	サポート	赤沢西尾根	☆大竹/村山/安原	15日	一の越ボッカ	
14日	前半	赤沢西尾根　★小浜	針の木西尾根　★酒井			
15日	**後立側**	饗庭/野村	高橋/岡野/伊藤/橋本	スバリ西尾根　★沖津	大スバリ沢支援　★笹谷	
16日	アタック			清水/大森/中野	守屋/山田/富田/仲	
17日		タンボ沢出合工作				
18日						
19日		タンボ沢/一の越	針の木西尾根二次★白井			
20日			笹谷/大竹/守屋/山田	御前沢クラノスケ乗越		
21日		前半終了/休養沈殿				
22日	後半	中央山稜　★笹谷	黒部別山　★谷口	2681尾根　★小浜	東一の越　★酒井	
23日	**立山側**	野村/山田/村山/岡阪	清水/守屋/安原/伊藤	中野/橋本	大森/岡野/羽根田/仲/柊	
24日	アタック				第三尾根　★高橋/大竹	
25日						
26日		後半終了/休養沈殿				
27日	下山	一の越経由				

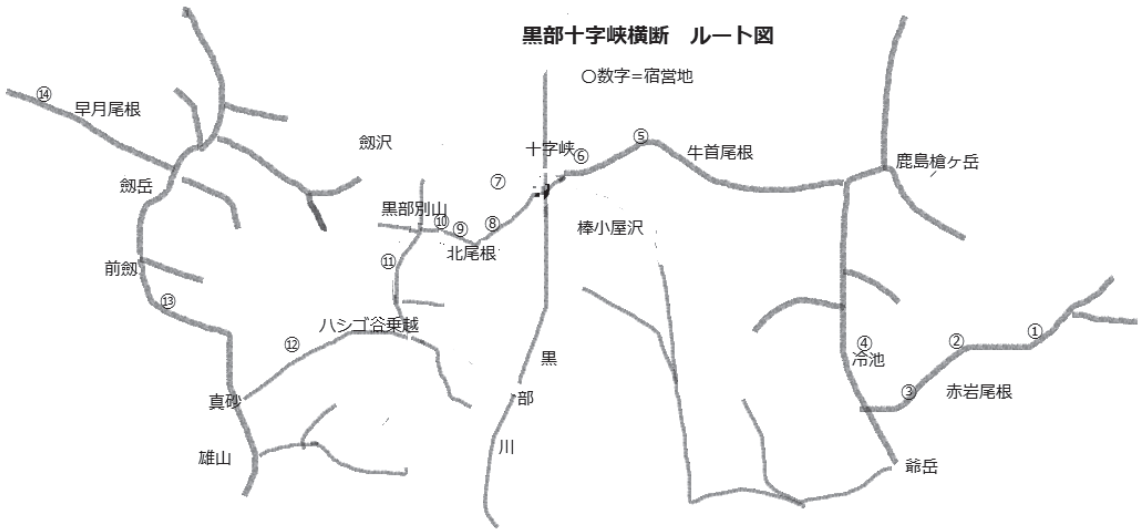
1960 年ごろの思い出

時代背景

1956 年マナスル、1957 年南極第一次越冬、1958 年チョゴリザ、1960 年ノシャック、1962 年サルトロカンリ遠征など、AACK 先輩の活躍あり、山岳部は一時総勢 70 名を超す大所帯、基礎訓練、新人合宿を体系的に実施して、山行は活発だった。安保騒動もあったが、経済は高度成長の兆しが見られ、黒四大町トンネル貫通は、その一例でもあった。装備もナイロン、ビニロンなど新繊維の実用化、テント、ザイルも軽量強靭となった。ビブラム底、軽量アイゼンなど、山岳部生活 4 年間の装備進歩は著しかった。

1957 年入部仲間

当時の 4 年間を回顧したい。高校時代に本格的な山行の経験したものは少なかった。例外は豊嶋、日本人離れした山男だった。新人は北山の藪漕ぎ、沢歩きに始まり、金毘羅、道場、鈴鹿の岩登り、剣沢の夏合宿、秋富士の雪氷訓練、笹ヶ峰の冬合宿まで、少人数の山行ふくめ先輩の指導を得て成長した。冬の高谷のビバークでは、実地指導で、新人たちがイグルーを見事に作って自信がついた。1 回生の基礎訓練は、計画的で、先輩各位から、手足の動かし方、ザイルさばき、ピッケルアイゼン、スキー、丁寧に指導を受けた。充実した新人時代の山行は、一つ一つ強烈な印象を与えてくれた。山の帰りに全国各地の仲間実家訪問もたのしみ、結束が深まったように思う。4 年間のリーダーは、松浦



祥次郎コッテ、竹内道雄ピラ、前小屋端ズンム、谷口朗クロの四氏。共通しているのは、目線が同じ高さ、気配り上手なこと。岩、雪、氷の技術を体系的に、個人に合わせて教えてもらった。剣沢合宿の時、他の名門私大の歩荷は新人が重荷、先輩は軽ザックで、ふうふう言っていたのに、我が方は食料に工夫し軽量化、先輩後輩区別なしで、4年間楽しめると確信した。

当時は宇治で1年過ごした。午後部室にあつまり、宇治川右岸の小さな岩場で、新人同士で足運びの練習をした。山口、脇野の上手さが光った。

笹ヶ峰の冬山の後、春山は剣岳早月尾根、小窓尾根の2ルートなど豪雪に沈殿続きを経験、逆らわないで待つことを覚えた。

2回生になり、夏秋、北ア、中央、南アの名峰を登るうちに各人が、好みの山を見つけるようになった。田附ガイガーに従った北海道日高の道なき山が良く、毎年、日高に通い、笹谷、福本、酒井は、日高、知床に魅かれた。冬は南アの豪雪にラッセルで闘い、春山は【イドンナップから幌尻岳】に参加した。様似から帯広に抜ける長い縦走で、食料の軽量化に努め、印象に残る山行だった。同春、別パーティーは黒部源流に出かけた。そして3回生の黒部中流、十字峡横断は、部全体の活動として、熟練された思い出の山行だった。

卒業後、多くは京都を離れたが、関西在住の仲間は山岳部活動の支援に努めた。笹ヶ峰ヒュッテの再建は田中ジローが山岳部長だったので、ヒュッテ改築委員長となり、原田A、小澤ポンタ、笹谷ベベが、現場に何回も足を運び、技術面と経済面で支援を続けた。後輩の梅里事故のケア、小林バコヤシへの支援、また、ブータン王室との交流も、笹谷、原田、小澤たちの努力は特筆されていい。ルーム日誌をまとめてコピー配布もしてくれた。いろいろ、ありがとう。

関東では、五十過ぎて、笠原が音頭をとり、丹沢、奥多摩、奥秩父を歩くようになった。小浜、饗庭、谷口、塩瀬、福本、酒井が月例で集まった。甲斐大泉の小浜小屋から八ヶ岳、仙丈岳、甲斐駒に足を運び、時に関西勢、九州の松井も加わった。松井の九重山荘にも集結し、瑞牆山には清水チョンペイの小屋に寄って登った。海外では、雲南、インド、キナバル、南米など足を伸ばすようになり、田中健、安田、伊藤たちは、今でも内外の山行を楽しんでいる。東京では、年2回、北山会を開き、十数名が集まる。30年続いている。

ふりかえれば、黒部春山世代で、笠原、中沢、小浜、山縣、饗庭、豊嶋（西邨）、笠目、大森、岡野、清水、田村が先だった。彼らとの付き合いは長く深く、回想すると、彼らの表情が目に浮かぶ。京都の4年間は、友に恵まれ山で協力

し合った、人生の華だった。

古希過ぎて山の絵を始めた。山岳部ロゴの「笛吹く牧神」の原典は、ルーブルの牧神ファウヌスでないかと描いてみた。下手な作だが、右にKUAC ロゴを入れた。

笛吹く牧神

十字峡横断を回顧する

田中二郎

1960 年 3 月 15 日から 4 月 7 日までの春の十字峡横断の回顧録を AACK ニュースレターに書こうかと言いだしたのは原田 A ちゃんである。松井オドラさんに相談したところ、一度メンバーが集まって飲み会を開き、当時の思い出話をして考えようということになった。せっかくの機会だから黒部中流合宿のメンバーも誘って賑やかにやろうということになり、それなら春山に参加してなかった 80 歳を超える同回生（当時 3 回生）も今後あまり集まる機会もないだろうから皆で集まろうと笹谷べべちゃんが提案して、結局 80 歳以上の 9 名と 1 学年下の田中ケンボウ、2 学年下の田中ジローの計 11 名の集まりとなった。場所は現役時代によく飲みに通った千本中立売のすぐ近くの五番町にある「月の出」で、日曜、祝日はお休みだというところを、3 月 21 日春分の日にわざわざ開けてもらっての宴会となった。

京都生まれ、京都育ちで、京大で定年退官を迎えた田中ジローが京都での飲み屋の予約をしたり、幹事役を仰せつかったのはわかるが、傘寿を越した年寄りは原稿などとてもよう書かん、一番若いジローが何でもよいから十字峡横断の記録を書け、と仰せになり、結局わたしのところにお鉢がまわってきてしまったのである。

1959 年 4 月に入学と同時に山岳部に入部し、宇治分校に通いながら、週に 1 度は水曜会と称する部会に出るために、西部構内の山岳部ルームへ立ち寄ってから岩倉の自宅へ帰るのが日課であった。山岳部へ入ってきた学生の多くがそうだったのではないかと思われるが、私も先輩の教えに従い、同級生らとともに、語学、体育、物理や化学の実習など出席の実績を問われる科目以外は、ろくに授業には出ないで、あばら家の物置のような宇治のルームで雑談を交わし、遊びほうけて夕方には電車で京都へ向かったものである。

私の教養部 2 年間の同級生には、のちにノーベル賞をもらった利根川進や前々総長を務めた尾池和夫などがいて、利根川の受賞祝いで始めたクラス会をいまだに十数回も続けている稀有なクラスであった。もっとも私は大学院生のときからアフリカへばかり行っていたので、不定期に行われるクラス会にはまだ 2 回しか参加してないのであるが。去年は京大楽友会館でクラス会を行い、来年は犬山で開催される予定で、犬山の霊長類研究所に 11 年間も居ついていた私も幹事役を押しつけられてしまった。このクラス会の連中が言うには、田中二郎はめったに教室へは現れず、まれにやってきたときには鞄のかわりにスキーやらザックやらを担いでいたな、とのもっぱらの評判であった。

本題を山登りにもどし、当時の部報 No.8 を見ると、5 月初めに鈴鹿の山をめぐり、7 月初旬には南アルプスの塩見岳から駒ヶ岳へと縦

写真１　目標の劔岳をはるか彼方に眺めながら牛首尾根を行く

走、7月末には穂高連峰へ岩登り合宿、そのあと立山に向かって縦走、8月後半には北海道へ汽車と青函連絡船で渡り、日高山脈のコイボクシュシビチャリ川を遡行してカムイエクウチカシ山に登ってサツナイ川へ下っている。帯広へ移動し、せっかく北海道まで来たからと石狩岳からトムラウシを散策し、痩せて小さかったが、イワナをどっさりと釣り上げた記憶がある。10月には片貝川から毛勝山を登頂、11月20日前後には恒例のアイゼン合宿のため富士山へ、12月末から1月にかけての笹ヶ峰スキー合宿をこなし、そして最後に3月16日から4月7日までの十字峡横断の記録が載っている。

もちろんこうした本格的な山行のほかに、大原の金毘羅岩登りにはしょっちゅう出かけていたし、時には宇治分校からも近い岩場や兵庫県三田市の道場にある岩場へ岩登りのトレーニングに通っていた。授業に出ている暇などあるわけがない。京大理学部に入ったつもりだったのだが、じつは京大山岳部に入ったと言った方が正しかったのかもしれない。

1回生だった私が積雪期の十字峡横断などというとんでもない難しい登山パーティーに参加した（というよりは入れられた）のはどういう訳だったのであろうか。たしかに私は小学校の時から自宅の岩倉から叡電で鞍馬まで行き、花背スキー場までよく滑りに行っていたし、洛北高校では山岳部に入り、京都、滋賀から福井にかけての北山へよく週末の山行を行い、連休や夏休みなどには岐阜から石川にかけてのいわゆる奥美濃や加越国境と呼ばれる山々へ沢歩き、藪漕ぎの登山に出かけていた。冬になると北山をはじめ、福井、石川の雪山へ山スキーにも通っていて、京大へ入っても、多くの新入生よりはかなり山へ登っていた経験はあったのだと思う。

それにしても、鹿島槍ヶ岳を越えて黒部川へ下り、十字峡を横断して黒部別山、立山、劔岳まで登って早月尾根を下ってくるという大山行に1回生を参加させるかどうかには、問題がありはしないかと議論があったと聞く。おそらくは夏の岩登り合宿や日高山脈での沢登り、富士山でのアイゼン・トレーニング、笹ヶ峰での外輪の三田原から火打へのスキー･アタックなど、連れていってくださった先輩たちから、ジローならまあ何とかついていけるのではないかとのアドバイスがあったのであろう。

私自身は、この計画が具体化し、秋には偵察や食料の荷揚げが行われていたときも、まさか私が参加することになるなどとは考えもしていなかったので、まるで無関心であったし、どんなところだろうかと考えもしなかったのである。当時の1回生は16名いたのであるが、その中から法学部3回生から入部してきた笠目進と私の2名だけが新人としてこの隊に参加することになり、9名が黒部中流合宿の方に参加することになった。この9名の中にインドラサン登頂まで果たした宮木靖雅トクが入っていないのは、彼は笹ヶ峰スキー合宿で足を骨折して2か月しか経っておらず登山は無理な状態にあったからである。2年年上の笠目氏の山登りの経歴はよく知らないが、指名されるだけあってかなりの登山歴と技術を持っていたのであろう。大きな頑丈な体で馬力も相当あり、そのいかつい風貌ゆえにヴァイキングと綽名され、皆からバイキンと省略形で呼びならわされていた。

さて、鹿島槍ヶ岳を登りつめてそこから牛首

尾根を下降し、十字峡へ、何とか黒部川を渡りさらに劔沢も渡って黒部別山の北尾根にとりついて立山まで登りなおす。立山から劔岳まで縦走し、目的を大半こなした後、早月尾根をのんびりと下って馬場島まで、よくぞ困難な山行を完遂したと思って、当時のフィールドノートを探し出してみたところ、そこにはなんと沈殿の日に歌いまくったラテン音楽の歌詞だけが書いてあって、上り下りの具体的な行動記録もなければ、苦労や感激をはじめとして1文字として記録に残せるような記述はなかった。塩瀬捷一郎リーダーが部報8号に記載された当時の行動記録と隊員諸氏の言動、天候記録や見晴らし、積雪の情報などを頼りに必死に記憶の底に眠っていたものを掘り起こし、何とか全行程の要所の一部だけを形にすることに努めた。塩瀬さんの書き残してくれた記事がなければとても記憶の残像すら思い起こすことはできなかったであろう。以下はそんな私のずさんな新人登山家の想い出話である。

1960年3月15日に京都を出発、翌16日、隊は7名の本隊が3名のサポート隊に助けてもらい、鹿島槍までは10名の編成で大町を出発した。大町の材木屋に頼み込んで小型トラックで大谷原手前まで人と荷物を運んでもらい、大助かりであった。40キロの荷物を担いで傾斜のほとんどない林道を歩いていったが、赤岩尾根への取りつきからは、上りにかかると全く足が上がらない。上りにかかる手前の取入小屋のところでテントポールを忘れてきたことに気づき、急遽小屋に入って対策を練る。Aちゃん、Bちゃんの2人に大町まで戻ってもらい、電話連絡して明日来ることになっている白馬岳パーティーにもってきてもらうことになった。

40キロの荷物を担いではとても急坂を登ることはできないので、取りあえず小屋をベースにしながら荷物の一部をボッカ（荷上げ）しにかかる。翌日には忘れてきたテントポールも無事に届き、何度も往復しながらの赤岩尾根の登攀は体力のいる仕事であった。下部の雪の深いところはワカンで登るが、まもなく固い雪面に達してアイゼンに履き替える。最後の急な雪面を直登し、膝が前の雪にぶつかるほどの傾斜を怖いもの知らずに何歩か登ったとたん、前面の視界が開け、そこは稜線であった。今になって2万5千分の1地形図を眺めてみると、1300メートルの高度差を誇る赤岩尾根のなんと急なことか。最低2度ずつは往復しながらよくぞ40キロもの荷物を担ぎ上げてきたものである。稜線をなだらかに北へ降りていくと冷池小屋がほぼ雪に埋まった状態で見つかった。

さて、ここからはまだ布引山を越えて鹿島槍ヶ岳までの縦走、そこが十字峡へ降りていく出発点で、今ようやくその出発点に差しかかったところである。鹿島槍から長い長い牛首尾根を延々と降っていって、途中の支尾根を西へとくびれ、2000メートル近く降りたところが目指す十字峡である。赤岩尾根よりはやや傾斜の緩いところが多いが、危険度からいえば登りよりも下りの方がずっと難度が高い。積雪期の十字峡がどのような状態になっているのか、夏、秋の偵察では悪天候のため到達できなかったのであるが、何とかして十字峡で黒部川を横断して対岸の立山へ、そして劔岳まで登っていかなければならない。目的地の劔岳は好天の中、険しい岩肌をあらわにして聳えたっていた。

牛首山からさらに降って2300メートル地点に荷物のデポを置いて、冷池小屋に戻り、ここでサポート隊の原田Bちゃん、田中ケンボウ、三島祥二の3名とはお別れである。いつものくずラーメンの食事後にソーセージや羊羹でお別れの会を催し、これまでのありがたいご協力に感謝する。翌日は早起きして朝飯の用意をしてくれたサポート隊の最後のご厚意に甘えて、本隊の7名は5時半に起きてすぐ朝飯のラーメンを食べる。全員で記念撮影をし、握手を交わしあって、小屋を出発する。牛首尾根の下部で南西へと十字峡に向かって降りる支尾根の最後部は急峻なうえに岩場のへつりの梯子が壊れかけていて、それを掘り出してフィックスロープを張り、1歩1歩とルート工作していくのは大変厳しいアルバイトであったと思われる。塩瀬リーダーの指揮のもと、原田Aちゃんと安田パクリマン、松井オドラと田村バッカスという3回生、2回生の脂の乗り切ったベテラン・コンビがこうした難所のルートを必死の思いで切り開いていく。笠目バイキンもそうだったのではないかと思うが、新人のわれわれ2人は予備知識もなにもなく、経験も技術ももちえず、意気に燃えたベテランがルート工作してくれた後を、ただただ1歩1歩と踏んでいってついていったというのが実情であったと思う。

35キロに減ったとはいえ、この荷物を担いで急な尾根を降りていくことは不可能である。ルート工作隊がザイルなど最低限の荷物で先行していき、残りの人数で、荷物を小分けして20キロぐらいずつ担いでデポ地まで運んでいく。3月22日、黒部川がすぐ下に見えるばかりのところまできて、1280メートルあたりに安全な台地が見つかり、ここへ取りあえずデポしておいて明日にはここへテントを張ることにする。対岸の眼前には劔大滝の壮大な流れが圧倒するばかりで、その左に見える黒部別山への北尾根、そして真上には立山と劔の雄峰が並んでいる。前夜のテント地まで引き返すが、松井、原田の2人は十字峡を目指してアンザイレンして偵察に降りる。4時ごろだったろうか、Aちゃんとオドラの2人が意気揚々と引き返してきて、報告する。「黒部に橋があるぞ。立派な吊り橋だ。」Aちゃんが興奮してぺらぺらと喋りまくる。ワイヤー1本ぐらいがかかっていて、我々はそれにぶら下がりながら川を越えなければならいことも覚悟して滑車も用意してきていたのである。吊り橋を確認したことによって、もはや十字峡横断は問題が一挙に解決した。

吊り橋は十字峡より50メートルほど下流にかかっている。橋は4本のワイヤーに細い横木が30センチ間隔に針金でしっかり括りつけてあってまったく問題ない。左岸を少し登った先の劔沢にはこちらも立派な吊り橋がかかっていて、これで安心して黒部別山の北尾根にとりつくことができる。

3月24日、寒冷前線の通過のため大雪で積雪60センチ。久しぶりの沈殿で予定より速いピッチで進んできたので、ふだん沈殿日は荷を軽くするため2食だったのが、今日は解放されて昼めしもたっぷりありつける。沈殿の日は退屈まぎれと空腹を忘れるために、いつもトランプでセブンブリッジをやったり、山の歌をがなり立てたりして過ごすのがふつうである。この山行では山の歌もうたったが、オドラと安田のリードでもっぱらタンゴなどのラテン音楽がテントに響きつづける。テントといえば、まだビニロン製のものばかりであったが、今回はサルトロ・カンリ遠征用に作られた天井の高い真っ赤なナイロン製のテントをもってきた。7人がゆったりと寝られる非常に居住性のよい代物で快適に過ごすことができたが、雨で湿った後に

写真2　劔沢にかかる吊り橋を渡る。真下に十字峡の一部が見える

冷え込んでくると凍り付いて通気性が悪くなって酸欠になり、みな息苦しくなってハアハアあえぎだす。ベンチレーターが小さすぎたのである。入口の吹き流しを開いて新鮮な空気をとりいれ落ち着きを取り戻す。

翌朝、冷え込んでゴチゴチに凍り付いたテントは畳むのに一苦労する。深い新雪をかき分けて最後の十字峡への下降である。フィックスロープと壊れた針金の梯子を掘り出し、時間をかけて慎重に牛首尾根を下りきり、吊り橋を渡って黒部川左岸の安全な棚地に到達、そこにテントを張りなおして、ついに十字峡に拠点を据える。26、27日と2日続きの雨と雪のため、黒部渓谷の流れの音を子守歌に結局ここに3泊することになった。

28日、2日間の沈殿から逃れて、星々がきれいに瞬く快晴の夜空を仰ぐ。明るくなってきてすぐ出発し、劔沢の吊り橋の上から十字峡に別れを告げる。

いよいよ北尾根に取りつき登り始める。3つのザイルパーティーに分かれ、先頭のパー

ティーが空身でラッセルとルート工作、一部の荷物はデポしておいて、後続の2パーティーが後をたどり、30分おきに交代しながら前進する。当時この方式を朝鮮ボッカと呼びならわしていたが、今は何と言っているのだろうか。対岸から眺めて想像していた以上に傾斜は急で、フィックスロープを何か所も張りながら、歩みは遅々としてはかどらない。

翌29日は怪しげな空模様であったがなんとか行けるところまでは行ってみようとダケカンバの疎林帯を登るがラッセルが深いのでアイゼンをワカンに履き替える。急な雪壁の登りになると先行隊のラッセルからスノーボールが次々とでき、だんだんと膨らんで後続のボッカ隊の上に小さな雪崩となって落ちてくる。なんとも嫌な感じだが、別山の北峰が間近に見られるのに勇気百倍して前進を続ける。

30日も天気はあまり思わしくないが、昨日の例もあるので、動けるだけは動くことにして出発する。北峰手前の急な雪面のトラバースで小さいとはいえ雪崩が私の足元をもろに直撃する。フィックスロープに助けられ安心感はあるが、生まれて初めての雪崩の直撃で足を取られそうになる体験はいま思いだしても恐ろしいものであった。雪崩の巣窟のような斜面を抜け、北峰に続く緩やかな雪面に出て本当にホッとし、テントを張ることとなった。

雪のため沈殿した翌日の4月1日はその名の通りエイプリルフールの1日だった。私の記憶からはまったく消えてしまっているが、塩瀬リーダーの報告書によると、「5時やゾ」のジローの声に、キーパーがガバッと跳ね起き、「すまん、寝すごした」と平謝り。ところが時計をよくよく見ればまだ午前1時。エイプリルフールらしい幕開けとなったが、迷惑なことをしたものだ。副低気圧が発生してぐずついた朝、9時の気象通報では副低気圧が東に移動しはじめていて晴れ間も見えるので、テントを撤収して出発しようとすると再びガスが立ちこめ、雪が降りだす。せっかくザックを担いで出かけようとしているのでエイ面倒と強行軍に乗りだす。しかし風雪はどんどんと強まるばかり、北峰を越えてすぐのところで視界も不良となり、これはやはり無理、沈殿とテントを張りなおす。1日中だまされ続けのエイプリルフールであった。

写真３　北尾根下部は樹林帯で傾斜もきつく雪も深いが、がむしゃらに登っていく

一夜明けて満天の星空のもと、ものすごく冷え込んだ中、来た彼方の後立山連峰がモルゲンロートに染まりはじめ、テントから出て撤収にかかる。テントはガンガンに凍ってみんなで寄ってたかって踏んづけてもとてもザックには入らない。黒部別山を越え、はしご谷乗越へと雪深い樹林の中をラッセルしながらダダ下りに降り、今度は打って変わったカンカン照りにうだりながら真砂岳へ続く別山尾根をゆっくりと登りにかかる。暑さと単調な登りに足の運びも鈍り、真砂岳に近づいた2500メートルあたりで今日の行程は終わりとし、濡れ物を乾かすなどのんびりした午後を過ごす。翌朝も快晴で早々に出発して3ピッチで稜線に着き、ここにザックをペグで固定しておいて、空身で雄山まで往復する。何日も前に辿ってきた鹿島槍ヶ岳から針ノ木岳などの景観も素晴らしいが、我々の行く手は真北の岩峰劔岳である。弥陀ヶ原の方からの風が強いが、室堂や雷鳥沢にはスキーヤーたちがポツポツと見られる。真砂岳で荷物を回収して下山用食料をデポしてある劔御前小

写真４　黒部別山から振り返ると雲海の上に出発地点の後立山連峰が連なっている

屋に立ちよるが、食料の大半は荒らされてなくなっていた。幸い食料にはまだ余裕があったので、残っていた米２升ほどとその他を回収し、あきらめて真っすぐ劔山荘に向かう。20 日ぶりに米の飯を炊くが、もひとつうまく炊き上がらなかったので、食いなれたラーメンの方がうまいな、などと冗談が出る。

４月４日、５日は曇っていてガスで視界が悪く沈殿。６日もまだガスが濃いが晴れてくると見込んで出発する。もうすぐ最後の目的地、劔の頂に立つと思うと気持ちは軽く、それほどの難所もなかったので、どんどんと飛ばす。平蔵のコルからすぐのガリーは岩場に凄い氷が張りつめていて、荷を担いだまま登りかけたＡちゃんが、途中で鎖が切れているといって引き返してくる。空身でザイルをつけて登ろうとするが、適当なホールドが見つからずに苦心惨憺、ようやくフィックスロープを張り渡して通過する。カニの横這いには雪も氷もついておらず、簡単に通ることができた。最後の難関を無事通過し、早月尾根との分岐点にザックを放りだして、駆けるように頂上へと向かう。「やった」「おめでとう」「ごくろうさん」とみな満身に喜びをあふれさせて、握手をかわしあう。折悪しく、薄いヴェールが立ちこめて視界はよくないが、はるか彼方にかすかに鹿島槍のピラミッドが認められる。

ついにあそこから十字峡を越えて、ここ劔岳の頂上まで無事にたどり着いた。７人が７人とも至極元気で、頑張りぬいてよくぞ来たものだ。頂上に円陣を組んで、ピッケルを振りかざし、エイ、エイ、オーと高らかに凱歌をあげる。登頂の儀式を終えると、三高寮歌そして雪山讃歌、さらにはとっておきのピースを吸う。劔山頂と鹿島槍に最後の一瞥ののち、惜しみながら早月尾根の下りにかかる。その日のうちに馬場島まで降りることは可能であるが、山の上での最後の夜を楽しむために 1900 メートル地点にテントを張って宴をはることにする。深夜まで語り明かし騒ぐつもりであったのだが、すべてをなし終えた満足感と安堵が疲れをよんだか、快い眠りを誘い、みな早々とシュラフにもぐり込んでしまった。翌日は霰がパラパラと降る中を一気に馬場島まで滑り降り、３月 16 日から４月７日までの 23 日間の山行が終了した。

厳しい積雪期十字峡横断、劔岳登山の経験は私のその後の山行にも大きな影響を及ぼしたと考えている。早月尾根から眺める劔の西面はズ

バッと切れ落ちた劔尾根の向こうに小窓尾根、赤谷尾根が連なり、あの尾根は挑戦してみたいなと大きな誘惑にかられる。翌年2回生の冬には野村ズッパリーダーのもと、山口ガチャ、清水チョンペイ、大森ゲジに加わって、小窓尾根を登ることになり、その次の年、3回生の5月には再びズッパリーダーのもと、大森ゲジと3人で劔尾根に挑戦する。悪天で予備日を使ってしまったせいもあって、下半のみで終わってしまったが、これでいよいよ雪の劔西面に取りつかれてしまったようである。秋には山岳部リーダーにされてしまったので冬は笹ヶ峰でのスキー新人合宿に行くことを余儀なくされたが、春山では劔周辺で合宿を行い、前半には上条オキミ、川田タイショウ、杉山スリコ、大原オイド、青山ピテカン、古瀬駿介、田中ショーチンなど1、2回生5名を含め8名で奥大日尾根に挑み、合宿後半には富田幸次郎、中野正文、杉山スリコのサポート隊による尾根の末端までのボッカに助けられつつ、宮木トクと2人で劔尾根を下半・上半を通して初登攀するという快挙をなしとげることを得たのである。

こうした積雪期の劔岳周辺での雪氷と岩峰登りの経験は、翌年4回生のとき実現させたインド、パンジャブ地方のインドラサン、デオ・チバ登頂という山岳部現役主体初めてのヒマラヤ遠征（隊長：小野寺幸之進教授、登攀隊長：酒井敏明オシメOB＋現役の大森、宮木、富田、田中、岩瀬の5名）の成功へと導くことができたのではないかと思っている。柳又谷遡行や北岳バットレス登攀などなど通年を通しての様々な山行を行い、それら日ごろのトレーニングや部員みなさんのご協力を得てのことにはちがいないが、私にとっては、じつに険しい日本の雪山登山のきっかけを作ってくれたのがこの十字峡横断山行であったと思われてならないのである。

追悼　原剛さん（2019年1月2日逝去）2

原さんの「山小屋サロン」

宮坂　実

私たちの回生（79年入部、山田ポール、伊藤クルンパ、高尾マッコウと同期）は原さん世代とは14年の差があります。我々の現役時代、原さんは雲の上の存在でした。同時に、私達の回生前後は原小屋やべべ小屋との関係が深い世代と思います。

原さんとの最初の接点は、ヒュッテ係だった2回生の時に6回生のお春さん（故人）が原小屋のことを話題にしたこと、京大ヒュッテで使う灯油がなくなった際、原小屋から拝借したことが最初でした。直接お会いしたのは、それから4～5年後になります。

当時の私から見ると、噂に聞く原小屋を共有という形で作ってしまう行動力や小屋そのものを非常にうらやましく感じました。京大ヒュッテの行き帰りに、別世界の出来事として原小屋を眺めていたものです。

社会人として東京勤務となり、同期の山田ポールと越後や東北の山行をしていました。その関係で、原小屋の横にべべ小屋ができたこと、べべ小屋の維持管理に「兵隊」が必要ということで、関東在住の独身で時間が自由に使える（？）社会人1、2年の我々にお声がかかりました。

噂で聞いていた原さんにお会いできたのは、べべ小屋のお手伝いに参加した1985年頃です。原小屋の隣にべべ小屋が完成しており、その維持管理に参加したことは非常に有意義な経験となりました。現代的な山小屋の維持管理を知ることができた上に（当時の京大ヒュッテの維持管理との比較）、集まる先輩諸氏やその仲間の話題が非常に面白かった。

当時の原さんトークの中で記憶に残っている一つは、「画商デュヴィーンの優雅な商売」という本の話題です。ユダヤ人画商が絵画好きのお金持ちのお得意さんに対して、どういう商売

をやってきたか、を歴史の事実を踏まえて小説風に創作した本です。なにかのきっかけで原さんはその本を話題としました。私も偶然その本を読んでいたので、山小屋で雑多な話題がされることに妙に感動しました。また、原さんは職業柄、当然不動産に詳しく、その方面の雑学談議は社会勉強としてかなり役立ちました。多面な分野で中身の濃い話題が飛び交うベベ小屋でした。

原さんは、多彩な人を多数引き付けるオーラがありました。自分の理想を大声で語り、実現する。その姿が人を引き付けていたのだと思います。ご葬儀にも、50年前に原さんに憧れていたと思われる武庫川女子大のOGなど、女性の方々が参列されていました。

原さんが目指していたことは、愉快な「山小屋サロン」を作ることではないかと思います。まずサロンの「場」としての理想の旧京大ヒュッテ、原小屋、その発展型のベベ小屋や新京大ヒュッテがまずある。小屋を作るごとに良い「場」ができていく。そこに集まる多彩な人たちとの交流や雑談は山小屋サロンのソフトウエアのようなもの。笹ヶ峰音楽祭は、原さんが理想とする「山小屋サロン」の更なる発展型と思いました。山小屋群と笹ヶ峰高原の最高の活用方法として笹ヶ峰音楽祭を実行してきた故世都子夫人とは、車の両輪だったな、と思います。

後日知ったことですが、原さんは理想とする「場」としての山小屋を作るために大学院に通い別荘の研究で修士をとられたとのこと。別荘の研究のために、頻繁に蓼科の別荘地などに行かれていたと聞きました。今の素晴らしい山小屋群があるのは、原さんの山小屋に対する熱意と研究の成果とも言えます。

笹ヶ峰音楽祭の時代は私個人の事情で山小屋やヒュッテから疎遠となっていました。原さんとの関係が復活するのは、私が東京に戻ってきたことと、ベベ小屋の修繕が必要になってきたからです。

ベベ小屋は完成後30年以上経過し、外部の劣化が目立ってきました。特に近年はキツツキが板張りの外壁に直径5センチほどの穴を10か所以上開けていました。穴から侵入する雨や雪、昆虫や小動物による二次的被害が懸念され始めました。断熱材もへたっていました。ベベ小屋修繕の話が動き始めた頃、原さんは既に入院されていました。一般社団法人笹谷山荘の理事（当時）でありご意見番である原さんに、お見舞いとともに、ベベ小屋の修繕工事のご了解を得るため、何回か病院に足を運びました。

最初のお見舞い兼ベベ小屋の初回修繕提案は、原状復帰案でした。板を外して張り替える案での見積もりでした。それに対して色々な対案アイデアをだされ、正直申し上げると閉口しました。原さんの自由な発想として、外壁の維持管理を人海戦術で行い、高いところに登るためのアンカーをつける案や、断熱効果を高めるために現場で発泡するウレタン素材をつかったらよい、などなど。ベベ小屋に詳しく、建築工法にも詳しく、思い入れがあり、頭脳はまだ明晰なため、ご意見の一部はもっともでしたが、ベベ小屋に行っていないため現在のトラブルのポイントをご理解いただけていない、と思いました。原さんのご意見に関する情報を集め、長期の維持管理が簡単になるような修繕方法を第2案として提案した頃は、だいぶ意識が混濁気味になっているように見受けられました。そのような病状でも、最後には改修の方向性にご了解をいただきました。了解を取り付ける過程で、原小屋とベベ小屋に対する原さんの思い入れ、大切にする気持ち、愛情が極めて深いものだと改めて実感しました。

ベベ小屋の修繕案には2018年の年末にご了解いただきました。2019年の年始にお見舞いに伺った際、偶然にも私の目の前で原さんは息を引き取られました。原さんから見た私は、関係が薄い後輩と思います。しかし、原さんが求めてきたこと、―山小屋が好きで、そこに集まるサロン的雰囲気も大好き―は、私の思いと同じです。私の目の前で息を引き取られたからこそ、原さんは、ベベ小屋、原小屋の維持管理を私にも託されたと感じています。

最後になりますが、原小屋から拝借した灯油は、お春さんからも伝達されていないはずで、おそらくそのままになっていると思います。原さんもお春さんも他界されてしまった今、天国の原さんから事後承諾を得られたと勝手に解釈することで思い出の締めくくりとしたいと思います。

原さん、ありがとうございました。

ハラさんと京大ヒュッテ、ベベヒュッテのこと

山田和人

僕にとってハラさんは、上の世代との橋渡しをしてくれるお兄さん的な存在で、ふたつのヒュッテを通してのお付き合いでした。

初めてお会いしたのは定かではないのですが、僕が現役学生の頃にハラさんは旧京大ヒュッテにベベさん達と上がってきてヒュッテ前の草地でバーベキューをやっていました。上等な牛肉などの食材をハラさんが京大ヒュッテの台所で準備していました。僕達現役学生がヒュッテの窓から首を並べていると、「お〜い、お前らも来て食べろ」と声をかけてくれるのでした。中には初めから箸と皿を握り締めて熱い視線を向けている山岳部員もいました。

僕が4回生の時に県道笹ヶ峰線の途中に笹谷山荘（通称ベベヒュッテ）が完成しました。この小屋のコンセプトや設備・機能の設計は、ハラさんが深く関わったと聞いています。当時の京大ヒュッテに比べるとピカピカの山小屋で、暫くは近寄り難い存在でしたが、ハラさんから声が掛かり、恐る恐る行くようになりました。その後は冬シーズンのスキー拠点として大いにお世話になることとなります。特に年越しにはベベさん・ハラさんの手による美味しい料理が出てきて、それ以来、僕は下界で紅白歌合戦を視ることはなくなりました。料理についてもここでハラさんから手ほどきを受けました。

京大ヒュッテの改修時にもハラさんは、設備・機能設計の発案・取り纏めを精力的にされていました。それだけでなく、資金調達にも知恵を働かせます。何人かの大OB達がベベヒュッテに集まることがあり、その夜は資金調達の話で盛り上がっていたのですが、誰も自分が幾ら出すとは言わず、一般論・総論的な話が続いていました。当時AACKの中でもケチで有名だった（？）大先輩が、酔って縺れた口で「ワシは〇十万円出そう」と発言した時、ハラさんの目がキラリと光りました。「おい、ポール、そこの棚にサラのノートがあるだろう。その表紙に勧進帳と書いて持ってこい」と。太いマジックで「勧進帳」と大書したノートを差し出すと、大先輩は少し尻込みしながらもトップバッターで書き込みをしてくれました。それに続いて居合わせた人達が次々に記入。もちろん、僕も。その後も資金集めには大先輩がトップを飾る勧進帳が威力を発揮したとハラさんから聞いています。新しい京大ヒュッテが完成した後、ハラさんが企画した笹ヶ峰音楽祭のことは、多くの方々がご存知のとおりなので、省略します。

ベベヒュッテは、建設当初に集っていたOBやその知人達も年齢が進み、10年程前からは利用者が減っていました。また建物の老朽化も少しずつ見えてくるようになりました。オーナーのベベさんからも自分の手から離したいというような話が見え隠れしていたのですが、この小屋が朽ちていくのは忍びない、とハラさんが言い出し、これを末永く維持して多くの人が利用できるようにしよう、とハラさんの号令がかかりました。小屋をよく利用していた4人がハラさんの下に集まり、共同利用を目的とする一般社団法人を立ち上げることになりました。現在、社団法人の代表理事は僕が務めていますが、組織的にしっかりとした法人運営がなされているので、管理メンバーが代わってもこの山小屋は継続していきます。

そのベベヒュッテは、キツツキの穿孔被害が酷いため、今夏、改修工事をおこないました。ハラさんも昨秋からこのキツツキ被害には心を痛めておられ、改修の案にもご意見をいただいていました。年末に最後のお見舞いに伺った折にも状況を説明したのですが、大きく頷いた後、手を大きく振り回して何か言おうとしていたのが今でも目に浮かびます。

年始にベベヒュッテでハラさんの訃報を受け取ったのは、その1週間後のことでした。ご冥福を祈ります。

第 49、50 回雲南懇話会のお知らせ

山岸久雄

第 49 回雲南懇話会を以下のとおり開催致します（事後のご案内になりますが、悪しからずご了承願います）。

1. 日　時：2019 年 8 月 19 日（月）13 時 00 分～ 17 時 30 分。その後、茶話会。
2. 場　所：国際協力機構（JICA）研究所、国際会議場（東京市ヶ谷）
   https://www.jica.go.jp/jica-ri/ja/about/access.html
3. 懇話会の内容

(1) トピック「南極隕石が教えてくれる太陽系の歴史」

国立極地研究所 地圏研究グループ准教授
山口 亮

(2) 映像トークショー「インド北東部、インパール・コヒマの今 ―人々の暮らしと祭礼―」

地球の旅人　東苑 泰子

(3)「多田等観と宮沢賢治 ―チベットに捧げた人生と西域への夢―」

花巻市博物館長　髙橋 信雄

(4)「生と死のミニャ・コンガ（7,556 メートル、中国四川省）―39 年間の物語―」

写真家・ビデオジャーナリスト、
北海道大学山とスキーの会、
雪崩事故防止研究会代表、
日本雪氷学会雪氷災害調査チーム前代表
阿部 幹雄

また、第 50 回雲南懇話会を以下のとおり開催致します。

1. 日　時：2019 年 12 月 22 日（日）13 時 00 分～ 17 時 30 分。その後、茶話会。
2. 場　所：国際協力機構（JICA）研究所、国際会議場（東京市ヶ谷）

会員動向

訃報

会員異動

編集後記

私が山岳部に入った 1967 年にはすでに伝説という感じも受けた 1960 年春山、お二人の筆でよみがえりました。ご寄稿の皆様、ありがとうございました。連日の猛暑は、発行のころにはどうなっているでしょうか。

横山宏太郎

次号原稿締め切り　2019 年 10 月 16 日
原稿送り先：横山宏太郎

発行日　2019 年 8 月 31 日
発行者　京都大学学士山岳会　会長　松沢哲郎
発行所　〒 606-8501
京都市左京区吉田本町（総合研究 2 号館 4 階）
京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科　竹田晋也　気付
編集人　横山宏太郎
製　作　京都市北区小山西花池町 1-8
㈱土倉事務所